

研究指導 青木 孝弘 准教授

男性の地域サロン利用を促す要因

—会津若松市内の事例から—

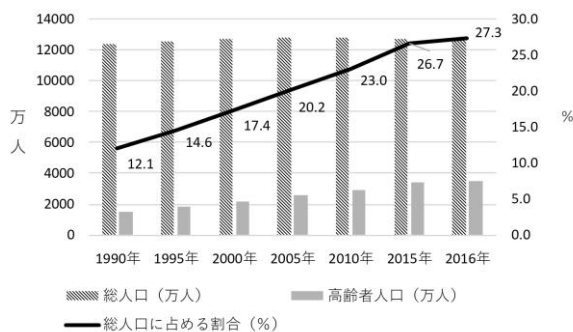
京谷 萌花

1. はじめに

1.1 高齢化の進行

内閣府(2017)[1]によると、65歳以上の高齢者人口は3,461万人(2016年9月15日現在推計)で、総人口に占める割合は27.3%となっている。前年(3,388万人、26.7%)と比較すると、73万人、0.6ポイント増と大きく増加しており、人口、割合共に過去最高となった(図表1)。

図表1 高齢者人口及び割合の推移



出典: 内閣府(2017)をもとに筆者作成

1.2 介護保険制度の現状

高齢化に伴い介護を必要とする人の増加が見込まれる中、一方では少子化・核家族化の進行で家族だけで介護を支えることは困難な状況となった。こうした状況から、介護を必要とする状態となっても安心して生活が送れるよう、介護を社会全体で支えることを目的として2000年4月から介護保険制度がスタートした。

介護保険制度では、介護が必要な状態を7段階に分類し(要介護認定)、そのうち、体のケアが必要な要介護を5段階、体のケアが必要ない要支援を2段階としている。なお介護サービスを受けるときの自己負担はサービス費用全体の1割となっている[2]。

介護保険制度の財源は、介護保険料が50%、国と県・市町村が25%ずつ負担する仕組みになっている。介護保険料は、自治体ごとに異なり、3年に一度見直されている。制度導入時は全国平均が月2,911円だった介護保険料は、現在は月5,500~6,000円へと値上がりし、会津若松市では月額6,050円である。

高齢人口の増加に伴って介護保険料は引き上げざるを得ない状況にあるが、このままでは保険料の値上がりに耐えられない人が増え、制度自体が成り

立たなくなると危惧されている。

介護保険制度の現状を踏まえ、各自治体では、介護保険の利用を少しでも抑えるために、介護予防に力を入れ、要支援の方を主な対象として通いの場を展開している。通いの場として多く用いられているのが地域サロンである。

1.3 地域サロンとは

地域サロンとは、高齢者が歩いていけるような場所を会場にした、誰でも気兼ねなく参加できる集まりのことである。高齢者が地域とつながり、孤立を防ぐことを目的としている。集会所、空き家、個人宅や介護施設等を活用している。

地域サロンでは、地域での支え合いや生きがいを重視し、お茶飲みや健康体操、ゲームレクリエーションなどを行っている。

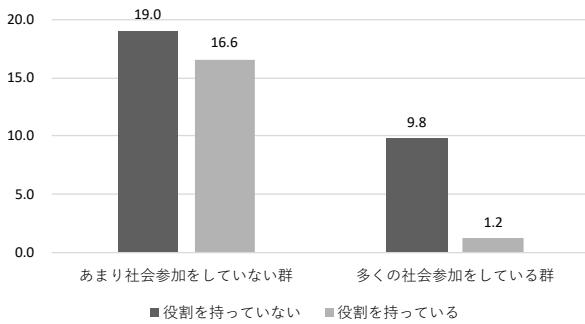
2. 先行研究

高取(2019)[3]では、地域における通いの場に参加していない男性高齢者を対象に、健康づくりを目的とした通いの場への参加を促進または阻害する因子を調査し、結果を反映させた男性特化型介護予防教室の試行実施とその効果を検証することを目的とし、ニーズ調査と運動プログラムを実施した。

ニーズ調査については、「1人でも気軽に参加できる場」であったり、「目的が明確」であると参加しやすいという結果が得られた。運動プログラムの実施については満足度が高く、開催時の参加意向も高かった。健康づくりを目的とした「通いの場」への男性参加には目的の明確化や選択性のあるプログラムの実施が適していることが示された。

高木(2014)[4]では、社会参加、役割の有無が男女それぞれの精神的健康(うつ発症)でどのように違うのかを検証した。65歳以上の高齢者2,728名を対象に、社会参加の程度、その際の役割の有無を尋ね、3年後に新たにうつとなる確率を分析した。その結果、女性では、社会参加も役割を持つことも、それぞれうつ傾向の発症を5~6割程度に抑制することが示された。男性でも、社会参加でうつ発症が5~6割に減ったが、特筆すべき点として、社会参加の程度は同等の人々の間でも、役割を持っている人がうつになる確率は役割を持たない人の約7分の1であった。役割を持って社会参加することは、特に男性で、うつの発症を著しく抑制することがわかった(図表2)。

図表2 男性のうつ傾向になる確率(%)



出典:高木(2014)より男性の結果を抜粋し筆者作成

3. 予備調査

3.1 会津若松市のサロン事業についてヒアリング

地域サロン事業の広がりや現状, 利用の課題について把握するため, 2019年10月16日, 会津若松市健康福祉部高齢福祉課第一層生活支援コーディネーターの國廣多美子氏, 介護予防担当職員の宇内裕美子氏にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査から, 地域サロンの利用に関して, 特に男性の利用が少ないことが明らかになった。

3.2 門田・大戸サロン大交流会 見学

2019年10月18日, 会津若松市門田・大戸地区のサロン約15団体が参加し, Wiiのソフトを使ったボウリング大会を見学した。男女の割合はほぼ同じで, 大会形式の活動に積極的に参加していた印象である。



写真:会場の様子(筆者撮影)

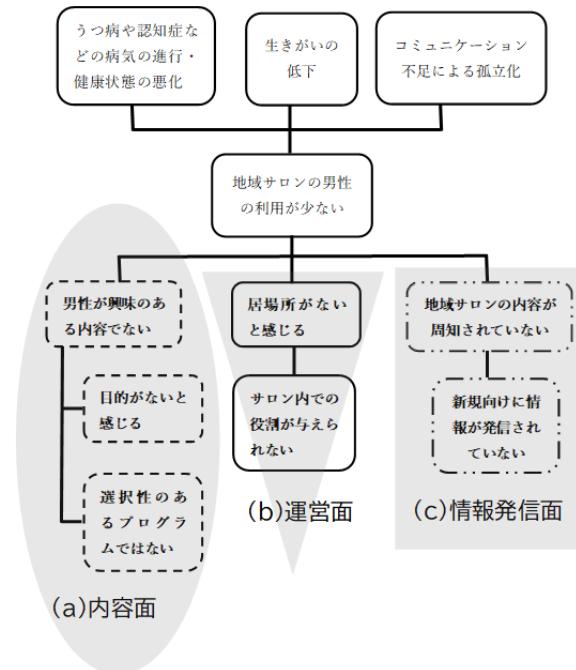
4. 仮説

先行研究の高取(2019)から, 男性の参加を促すには, 「目的や役割が明確である」, 「1人でも気軽に参加できる」ことが有効であると示唆された。さらに高齢福祉課へのヒアリング調査から, 男性がサロン内で役割があることが利用につながるのではないかと考えた。そこで, 検証するにあたり, ロジックモデルを用いて問題分析を行った(図表3)。

地域サロンの男性の利用が少ないことの原因とし

て, 男性が興味のある内容でないこと, サロン内での役割がないため居場所がないと感じること, 地域サロンの活動があまり知られておらず, 新規向けの情報発信が十分にされていないため, 地域サロンの活動があまり知られていないことがあげられる。反対に, 男性の利用が少ないことによって病気の進行や健康状態の悪化, 生きがいの低下, 孤立化などの悪影響が起こり得ると考えられる。

図表3 ロジックモデルを用いた問題分析



以上から, 本研究では地域サロンの男性利用を促す要因は(a)内容面, (b)運営面, (c)情報発信面の3分野に起因していると考えられる。つまり, (a)内容面では活動の目的や内容が明確であること, (b)運営面では男性がサロン内で役割があること, (c)情報発信面では新規向けの情報発信がされていることが地域サロンの男性利用の促進要因であるというのが本研究の仮説である。

これを検証するため, 会津若松市内の男性利用が盛んな地域サロン事業を対象にヒアリング調査を行う。

5. 本調査

会津若松市健康福祉部高齢福祉課第一層生活支援コーディネーターの國廣多美子氏にご仲介いただき, 男性利用が盛んな3つの地域サロンにヒアリング調査を行った。仮説ごとの質問項目を以下に示す。

(1) 仮説(a)内容に関する質問項目

・活動の目的が明確であることは男性の利用につな

¹ 文部科学省[5]によると, ロジックモデルとは, ある施策がその目的を達成するに至るまでの論理的な因果関係を明示したものである。ロジックモデルを策定することは, 事前又は事後的に施策の概念化や設計上の欠陥や問題点の発見, インパクト評価等の他のプログラム評価を実施する際の準備, 施策を論理的に立案する等のうえで意義があるとされる。

がると考えるか

(2) 仮説 (b) 運営に関する質問項目

・サロン内での役割を与えることは男性の利用につながると考えるか

・男性の利用を増やそうと思うか

・男性に利用してもらうには何が必要であるか

・男性に利用してもらうために行っている工夫はあるか

(3) 仮説 (c) 情報発信に関する質問項目

・サロンの周知の方法は何か

5.1 ケース1 中前田せせなぎ会

5.1.1 調査概要

日時:2020年1月15日

対象:会長 佐藤幸雄氏, 役員 板橋光義氏, 高野地区民生児童委員 古川純夫氏

同会は2003年に始動し, 現在は15人ほどの参加人数で年間5回開催されている。活動場所は会津若松市中前田公民館である。活動内容は日帰り温泉, 体操, 各種教室など様々である。

5.1.2 回答

内容面については, 活動内容や目的が明確であると次の人も来るので大事だと思うという回答が得られた。運営については, 役員が男性であるため, 自然とサロンの利用につながっているという回答が得られた。また, 男性の利用を増やしたいとは思いますが強制しようとは思わず, 男性の利用に必要なことや行っている工夫は特に思いつかないと回答した。情報発信については, 会の活動案内は町内放送で行っているとの回答が得られた。

5.1.3 小括

男性の利用を増やしたい考えはあるが, 現状維持の意向である。役員が男性が担っているため自然と利用につながり, 活動内容も毎回明確に決定されている。また活動の案内を町内放送で行っていることから, 地区内に広く周知されていることがわかる。

5.2 ケース2 鶴沼コスモス会

5.2.1 調査概要

日時:2020年1月20日

対象:会長 齋藤芳夫氏

同会は10~12人の参加人数のうち4割の男性会員で月1回活動している。その他に年1~2回程度で温泉に行くなどの企画を行っている。活動場所は会津若松市鶴沼公民館である。活動内容はお茶を飲みながらのコミュニケーションが主だが, 温泉での運動やレクリエーションも行っている。

5.2.2 回答

内容については, 集まった時に次の活動内容を決めると人が集まりやすいため, 目的の明確化は利用につながると思うという回答が得られた。運営については, 役員が役割をほぼ男性が担っていることや,

会場設営など力のいる仕事を男性が行っていることから, 利用につながっているとの回答が得られた。また, 男性の利用を増やしたいとは特には思わず運営側は現状に満足しているとのことだった。さらに, 男性に利用してもらうには生い立ちも含めて, 特技をもっているメンバーがいることが必要であると回答している。情報発信については, 主に回覧板やチラシなどで会の活動を伝えており, 近所で居合わせた時や酒の席でも活動の周知を図っているとの回答が得られた。

5.2.3 小括

男性の利用については現状に満足しているようだった。会員には様々な生い立ちや人生経験のある人が多く, その多様さから他のメンバーの積極的な利用につながり, いい雰囲気づくりができていているという。会の役員を男性が担っていることも利用につながっている。

5.3 ケース3 男の料理教室

5.3.1 調査概要

日時:2020年1月24日

対象:代表 青山孝男氏, 会員の皆様

同会は5年ほど前に発足し, 会津若松市城南コミュニティセンターのキッチンスペースにて活動を行っている。現在会員は10人で, 活動は年単位だが毎月20日を目処に会員の募集を行っている。

5.3.2 回答

内容については, 会の名前から内容や目的が明確であることがわかるため, 利用につながっていると思うという回答が得られた。運営については, 調理の作業分担が無意識的にされており, 各々役割を持っているため, 利用につながっており, そのため, 役割は大事だと考えるという回答が得られた。また, 男性の利用を増やしたいとはあまり思わないと回答した。さらに, 男性の利用に必要なことは誰もが平等に参加しやすい環境であること, 行っている工夫は誰でも作れるような簡単なメニューにすることと回答した。情報発信については, 3か月に1回チラシで活動の案内をしていると回答した。

5.3.3 小括

男の料理教室という名前の通り, ターゲットを男性に絞っているため, 男性の利用が盛んなことは明らかである。料理教室の他にもスマホ教室やそば打ち教室を行っており, メンバーも共通しているため参加がしやすいのだと考える。

6. 考察

各地域サロンの回答から (a) (b) (c) の3つの仮説ごとに検証を行い, 男性の利用を促す要因について検討する。

6.1 仮説 (a) 内容に関する検証

回答から, 活動の目的や内容が明確であると次

回も利用につながり、活動するにあたって一定の人数を確保できているという事実が明らかになった。よって、活動の目的や内容が明確であることは男性のサロンの利用につながるという仮説は支持されたと考える。

6.2 仮説(b)運営に関する検証

サロン内での役割を与えることは男性の利用につながると考えるかという項目では、調査した地域サロンの役員の方々がおぼろげに男性であったため、必然的に利用につながっていることが明らかとなった。また、役員の仕事だけでなく会場の設営や調理作業の分担が行われ、各々が自分の役割を持っていることが分かった。このことから、サロン内での役割を持つことは男性の利用につながり、仮説(b)は支持される結果となった。また、個人の特長や能力を尊重し、それを会の雰囲気づくりに活かすこと、誰でも取り組める内容にすることも効果的である。

6.3 仮説(c)情報発信に関する検証

サロンの周知の方法は何かという項目については、チラシや回覧板、町内放送で行っているという回答があった。中でも町内放送は、音声のため広く周知されると考えられる。

6.4 まとめ

本研究では、男性のサロン利用を促す要因として(a)活動の目的や内容が明確であること、(b)男性の役割があること、(c)新規向けの情報発信がされていることの3点を仮説としてあげていたが、調査の結果、活動の目的や内容が明確であること、サロン内で役割があることは、男性の利用を促す要因となり、この仮説に当てはまることがわかった。しかし、今回調査した団体では新規向けの情報発信がされていないため、仮説の検証には至らなかった。よって、仮説(a)と仮説(b)は支持され、活動の内容や目的が明確であること、男性の役割があることは、地域サロンの男性の利用を促す要因といえる。

7. 評価

会津若松市健康福祉部高齢福祉課第一層生活支援コーディネーターの國廣多美子氏に本研究の知見についての評価をいただいた。以下抜粋しまとめたものである。

「地域を回ると男性のサロン参加が少ないという声をよく聞く。一般的に男性は女性に比べると人との交流も少なく、外出の機会がないまま過ごしてしまうことも多く、介護が必要な状態になりやすくなる。このことを踏まえて、男性のサロン利用を研究テーマにしても良かったのだと理解する。

内容面については、サロンの担当者自身が気づかずに工夫していることもあるかと思う。想定される工

夫の内容について掘り下げて聞いてみたのかも気になる場所である。運営面については、男性がサロンの世話係をすると女性とは違う目線での企画があり、男性も参加しやすくなる。市や包括支援センターはサロン立ち上げ時にできるだけ男性への声掛けをしているところである。情報発信面については、大切なところである。回覧板は家族の一人しか見ないで回してしまうと、高齢者は知らずにいたり、町内放送は耳の聞こえない高齢者には届かないという場合もある。人を多く集めたいときは重複でお知らせするのが効果的であると考え。」との評価をいただいた。

8. 終わりに

本研究では、情報発信に関しては検証に至らなかった。その理由として、質問の仕方や想定される回答についての掘り下げ方が足りなかった。これをさらに追及していくことが今後の課題である。また、地域サロンの男性利用を促す要因を探るためには、運営側だけでなく利用者側も調査する必要がある。

謝辞

ご多忙の中、ヒアリング調査・評価にご協力いただいた会津若松市健康福祉部高齢福祉課第一層生活支援コーディネーター國廣多美子氏、介護予防担当職員宇内裕美子氏、中前田せせなぎ会会長佐藤幸雄氏、役員の板橋光義氏、高野地区民生委員古川純夫氏、鶴沼コスモス会会長齋藤芳夫氏、男の料理教室代表青山孝男氏、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 内閣府(2017)「高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向」『平成29年度版高齢者白書(全体版)』
- [2] 公益社団法人 全国老人福祉施設協議会「介護保険制度」
http://www.roushikyo.or.jp/contents/about/jigyo/kai_gohoken/ (2019.10.29 アクセス)
- [3] 高取克彦(2019)「地域在住男性高齢者における健康づくりを目的とした「通いの場」へのニーズ調査と男性特化型介護予防教室の試行実践」『理学療法学 Supplement』Vol.46 Supple. No.1
- [4] 高木大資(2014)「役割を担って社会参加している男性ではうつリスクは7分の1」『JAGES Press Release』NO: 48-14-002
- [5] 文部科学省「ロジックモデルについて」
https://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/06032711/002.htm (2020.2.5 アクセス)